

ヴィゴツキーの内言と外国語学習 —日本語話者の英作文学習を例として—

Vygotsky's Inner Speech and Foreign language Learning
—A Thought on Japanese Speakers' English Writing—

川村 義治
Yoshiharu KAWAMURA

要旨

「内言」はロシアの心理学者ヴィゴツキーの用語である。本稿は、内言に関するヴィゴツキーの見解を検討した後、内言と第二言語習得の関係に関する研究を踏まえて、日本語話者の英作文の過程を内言の発達という観点から考察して、効果的な学習法を提案した。

内言は主題的主語を省略した述語中心のことばである。日本語は主題優越言語でかつ主題を省く傾向がある。一方英語は主語が義務的な主語優越言語であり、書き言葉はその要素が最もよく見られる形式である。したがって、日本語話者が自らの内言を英文で書き表すとき、主題—叙述の関係はもちろん、主語—述語の関係、動作の主体と対象の関係を注意深く考慮する必要が生じる。換言すれば、日本語話者にとって英作文の学習は英語の特徴を学ぶ最も有用な機会であり、自らの日本語の内言を捉え直して思考を深める機会でもある。外言の内言化および内言の外言化の視点からprivate speechの有効性も提案した。

キーワード

内言 日本語話者 英作文

1 はじめに

「内言」(Inner Speech)は、「発達の最近接領域」(Zone of Proximal Development)という概念でよく知られている。ロシアの心理学者レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキー(Lev Semenovich Vygotsky, 1896-1934)が提出した概念である。生前最後の年に発表された主著『思考と言語』は、およそ30年後の1962年にアメリカで出版されると、心理学、言語学、教育学関係者の間に大きな反響をもたらした。ヴィゴツキーは、外言が内在化して内言になると主張した。彼は子どもの自己中心的なことば(Egocentric Speech)を「ことばの発達における外言から内言への過渡期的段階にあるもの」⁽¹⁾と捉えた。そのうえで、自己中心的なことばは子どもの発達とともにしだいに内在化して言語的思考を担う内言に転化すると考えたのである。

このような見解は、母語の習得過程の考察に基づくものであるが、第二言語獲得においても言語の習得は内言の発達と深く関与するのではないかという仮説が立てられている。海外における研究の一端はVygotskian Approaches to Second Language Research (1994)やInner Speech-L2 (2005)などの書籍で知ることができる。日本ではヴィゴ

ツキー研究者による見解が2000年以降学会誌『ヴィゴツキー学』に掲載されてきた。

本稿は内言に関する考察を再考し、第二言語習得における内言の役割という観点から日本語話者の英作文学習の意義を検討する。

2 ヴィゴツキーの見解

2-1 自己中心的なことばの役割

ヴィゴツキーは、幼児は周囲から話しかけられる環境下で言葉を学ぶと考える。したがって、言葉は社会的な存在であり、コミュニケーションの手段として提示される。幼児は相手に情報を伝える手段として言葉を使い始めるが、次第に独り言のような自己中心的な言葉使いも目立ち始める。しかし、年齢が上がると、そのような自己中心的なことばは次第に見られなくなる。ヴィゴツキーは、言語能力の向上の結果つぶやきが消滅したのではなく、思考を促す内言へと転化したと考えた。

2-2 内言の「述語主義」

ヴィゴツキーは、まず外言は他人へのことばであり、内

言は自分へのことばであると規定して、内言が単なる言語的記憶であるという考えや話し言葉から音声を取り除いたものという見方を退ける。そして、内言が外言と形式上異なる点として、断片性、不完全さ、省略性を指摘する。その特徴が最も現れているのが「述語主義」である。文の主語が省略されて、述語のみが意識活動を担うのである。

親しい者たちの間で交わされる話し言葉では、何が話題になっているか互いに明白なので主語がしばしば省かれるように、「内言では、われわれは、話の題目、すなわち主語を言う必要はまったくない。われわれは常に、その主語について言われることがら、つまり述語にのみ言葉を限定する」⁽²⁾とヴィゴツキーは述べた。彼が言及している主語は、今日の用語では主題的主語である。

2-3 内言の意味論

内言は縮小や省略に満ちたものであるが、そのような形態面での特質は、内言の意味的特質とつながっている。第一に、内言では「単語の意味が単語の語義に優越する」⁽³⁾とヴィゴツキーは述べる。語の語義とは辞書に書かれている項目に相当する、抽象的で客観的な概念である。各語は発話の中で使用されると、文脈や発話場面の事情に応じて固有の具体的な意味を表す。つまり、語の意味は語義の概念を反映しながら拡大する。心の中でつぶやく内言は言語規範に縛られなくてもよいので、主観のおもむくまま語義概念をよりいっそう拡張することが可能である。

第二の意味特徴は単語の膠着あるいは結合による新たな意味の創造である。複雑な概念を表す必要があるとき、外言ではしばしば言葉を重ねてより分析的に表現するが、内言では複数の単語が連合してひとつの複合語を形成する傾向があるとヴィゴツキーは指摘する。複数の語の連合は、子どもの自己中心のことばにも似たような現象が見られるという。外言でも語の連合に似た現象は見出される。英語の句動詞はその一例である。個々の語はそれぞれの複雑な語義を失うが全体として新たな意味を形成する。

内言の第三の意味特徴は、第一の特徴である意味の拡張、第二の特徴である語の連合による新たな意味の生成を合わせたような作用である。それはわずかな語句で際限なく意味を表すことができるという点である。ただし、ヴィゴツキーがゴーゴリーの小説『死せる魂』のタイトルの意味の広がり为例にして説明したように、これまで指摘された内言の意味特徴は話し言葉や書き言葉にも似たような現象が見出される。つまり、内言は特殊な統語形態と意味作用を持つが、言語の特性という点では他の言語形式と共通する。

2-4 言語活動の分類

ヴィゴツキーは、内言の統語的特徴を語るとき、絶えず外言と内言、話し言葉と書き言葉、母語と外国語の対比を念頭に置いている。彼は話し言葉が基本的に対話の中で用いられ

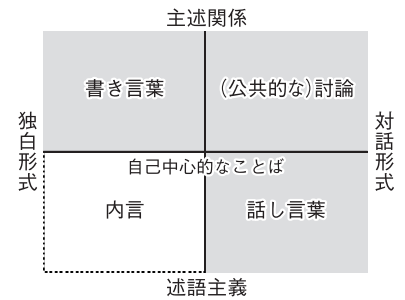


図1 言語形式の分類

るのに対して、書き言葉と内言はモノログとして区別する。話し言葉と内言は省略的で(ただし英語のように主語が義務的な言語もある)、とりわけ内言は述語主義が著しいと指摘する。一方、書き言葉は話し言葉と比べるとより複雑な構文構造を持つ。したがって、発話の形式と主部一述部の関係を軸に言葉を分類すると図1のようになる。灰色部分が外言である。ヴィゴツキーが「その心理学的機能においては内言であり、その構造においては外言である」⁽⁴⁾と定義する子どもの自己中心のことばは、話し言葉と内言の境界に位置する。なお、右上の空白部には、対話形式をとるが主述関係を明確にして論理的に話すことを求められる公的な場での討論を入れた。

2-5 言語的思考

内言は、無言のまま自分自身に話しかける話し言葉ではない。最近の脳科学の調査によれば、内言は発声の運動機能や音声記憶を司る部位を含む脳内の様々な箇所を賦活させる活動であることがわかっている。したがって内言は「音声のない言語」ではなく、「神経的」言語活動である。

また、内言は脳内で蓄積されたことばであるという見方がある。ヴィゴツキーは、言葉の意味とは何かと問いながら、「それはことばであると同時に思考でもある。なぜなら、それは言語的思考という単位である」⁽⁵⁾と明確に主張する。ことばはコミュニケーションの機能と思考の機能の二つを持つというのが彼の言語観である。

3 第二言語習得と内言

3-1 内言の意味

ヴィゴツキーの内言理論は、第二言語習得に関心を持つ者にとっては魅力ある仮説である。母語の習得が豊かな内言を伴うように、第二言語習得においても内言の発達を促すことで目標言語の学習向上が期待できる。

ヴィゴツキーは、母語と外国語の習得の違いについて、「母語の発達が言語の自由な自然発生的な利用から始まり、言語形式の自覚とそのマスターで終わるとすれば、外国語の発達は言語の自覚とその随意的な支配から始まり、自由

な自然発生的な会話で終わる」⁽⁶⁾と述べる。この発言は注意を要する。まず母語であれ外国語であれ、高い運用能力にはその言語を用いて思考できるような豊かな内言が発達することが前提ではないか。さらに、「外国語の発達は言語の自覚とその随意的な支配から始まる」という説明も注意しよう。第二言語習得の方法には、イマージョンプログラムのように低年齢の学習者に無自覚的・無意図的に目標言語に接する機会を与えるメソッドがある。言語的思考を司る内言の発達を刺激する方法は、学習者の年齢や学習レベルに対応して多様であると思われる。

3-2 内言とワーキングメモリ仮説

記憶効果を高める方法として、意識の中で言語材料を反復するメンタルリハーサルがある。情報の維持と処理に関わるワーキングメモリ仮説には音韻の貯蔵と再生を司る音韻ループというシステムが想定されている。西本有逸(2002)はワーキングメモリを「内言の運動を活発促進する一種の『駆動システム』」⁽⁷⁾とみなすが、メンタルリハーサルという内言の活動が音韻ループの音韻再生スパンを意識的に強化するとも仮定できるのではないか。

Guerrero, M.C.M. de (2005, p136) は、語学力が様々なレベルの第二言語学習者を対象に内言の使用を調査し、一般的傾向として内言の使用が語学力の向上とともに増えることを明らかにした。さらに、内言の構成に関しても質問し、語学力のレベルに関係なく学習者は単語レベルのことばを多用していることがわかった。句や文単位の使用に関しては学力と使用頻度に相関がみられた。ただし、単語、語句、文と統語形式が複雑になるにつれて、どのレベルの学習者でも使用度が下がった。これは内言の短縮性や省略というヴィゴツキーの定義と一致すると考察されている。

3-3 Private Speechという存在

子どもの自己中心のことばは、現象的にはつぶやきである。大人でも日常ちょっとした問題に直面すると、解決策を模索して内言を外部に吐露することがしばしばある。このような発話はprivate speechと呼ばれる思考をまとめる機能があるのだろう。

Guerrero, M.C.M. de (p.74) によれば、複数の研究者が第二言語学習者のprivate speechの発生を第二言語の内化の過程であると同時に彼らの内言が外在化する過程であると考えている。McCafferty, S. G. (1994) は、第二言語習得におけるprivate speechの有効性という観点から、語学力別に分けた第二言語学習者に課題を与えてprivate speechの使用を調査した。発話は課題内容自体に関するもの、調査者あるいは学習者自身に向けられたもの、課題達成に関するものに分けられた。下位グループも上位グル

ープも課題自体に関する発話が圧倒的に多かった。また、いずれの範疇でも下位グループの発話数は上位グループを上回った。この結果から、private speechは質的区分を持ち、学習者の思考を支援すると仮定できる。目標言語を含むprivate speechを活性化させることで目標言語の内化を促進できる可能性がある。

4 英作文の可能性

4-1 目標言語で考える

第二言語指導の現場では、しばしば「英語で考える」(think in English language) という主張がなされる。しかし、これまで考察してきた内言の定義を受け入れるならば、母語も第二言語も内言は断片的かつ短縮された形態で、述部中心である。また、概念内容も個人的な捉え方を反映するので、「英語で考える」という意見は安易に受け入れられない。おそらく、長期記憶として定着している日本語と英語の知識がそれぞれの断片的な内言をサポートするのだろう。

また、近年第二言語習得における母語の役割が見直しされつつある。Woodall, B. R. (2002) は、第二言語の内容を理解したり第二言語を使って文を書いたりする行為は複雑な認知的プロセスを要求するので、とりわけ語学力が低い学習者には事情に応じて母語を積極的に介在させることで学習をより効果的にすすめることが可能になると指摘する。

したがって「英語で考える」ことは結果であり、言語と思考の発達という観点から目標言語による内言の活動を促す方法を模索するほうが実用的である。

4-2 英作文の役割

書き言葉の能力は内言を前提として形成されるとヴィゴツキーは考える。⁽⁸⁾ 内言と書き言葉は構造上対照的である。ヴィゴツキーは内言から書き言葉を導き出す過程を、「書きことばは、他人に最大限に理解されることを目指したことばである。そこでは、徹底的に証拠立てるものがないから、最大限に省略された内言、自分のことばから、最大限に展開された書きことば、他人へのことばの移行は、子どもに意味的組織の有意的構成の複雑な操作を要求する」⁽⁹⁾と分析する。この考察を日本語話者の英語学習にあてはめてみよう。

Lyons, John (1977, 500-511) は、主語という概念に三つの機能を見出した。一つは論理的主語である。ある行為や出来事の主体として動作主的役割を担う。二つ目は文法的主語である。文法規則に基づいて述語動詞の形を支配する。三つ目は、主題的(心理的)主語である。一般に発言はある話題に対して叙述するという形式をとる。主題はし

ばしば文頭に位置して文の出発点の役割をはたす。

世界の言語は類型的に主語優越言語と主題優越言語に分かれる。英語は前者で日本語は後者である。英語の主語は義務的であり、言語化することが求められる。一方、日本語の「主題」は、話し手と聞き手がすでに共有している話題として言語化されないことが多い。それゆえ、日本語話者が英文を作成するとき、「主語」―「述語」の文法構成、「主体」―「対象」の論理構成、「主題」―「叙述」の主題構成の観点から、短縮と省略の著しい日本語の内言を肉付けしながら英語の内言を活用して英文を組み立てる作業を行うことになる。英作文の学習は、英文の文法構成、論理構成、主題構成を意識的に学ぶ最も有用な機会であると言える。

4-3 指導法の提案

課題例： 〈おもしろかった〉

〈おもしろかった〉+〈何〉

→ The movie was fun.

「映画はおもしろかった」+〈誰〉+〈する〉

→ I enjoyed the movie.

上記の課題では、〈〉で囲まれたことばは内言である。日本語話者は〈おもしろかった〉という自分の内言に即座に主題を加えて「映画はおもしろかった」と発言できる。ただし、英語の書き言葉レベルの意識を持つためには、だれが映画をおもしろいと経験したかを問うことになる。このように、英文を作成する際には主題関係に加えて、文法

関係、論理関係を絶えず意識化することが求められる。

日本語の内言を英訳するとき、声を出しながら考える学習スタイルは試みる価値がある。近年ではthink aloudと呼ばれる方法である。private speechが内言の外言化と外言の内言化に役立つならば、英語学習にも役立つと思われる。日本語の内言に明解な形を与えて英語に転換する、あるいは英語表現をリハーサルして内言化する手がかりにする。つぶやくことでワーキングメモリの音韻再生機能を強化して学習項目の長期記憶化を促進するほか、自分の思考過程を音声化して認知するので、メタ認知が働いて思考力が高まり、日本語と英語の相互転換を円滑にすすめられると仮定できる。

5 まとめ

ヴィゴツキーの見解の中で興味深い記述の一つは、内言は述語主義であるという指摘である。とりわけ日本語が主題優越言語なので、叙述が心に浮かぶという点で彼の説明に得心がいく。母語によって内言の形態にどのような相違が見られるのかは不明であるが、日本語話者の内言は、主語はもちろん目的語に相当する語も省略され、事態の変化を表す語句や主観的な感想を表す語句を含む断片的な叙述が主ではないだろうか。そうであるならば、日本人の英語力の向上には、どのようなメソッドを用いるにしろ、絶えず論理構成、主語―述語の文法構成、主題―叙述の主題構成の観点から自らの日本語と目標言語である英語を捉え返す思考が求められる。その思考過程が豊かな内言を育てる。英作文はそのための訓練の機会である。

注

- (1) ヴィゴツキー, p200, 新訳『思考と言語』, 柴田義松訳, 新読書社, p61
- (2) *ibid.*, p411
- (3) *ibid.*, p414
- (4) *ibid.*, p384
- (5) *ibid.*, p20
- (6) *ibid.*, p320
- (7) 西本有逸, 2002, ヴィゴツキーと第二言語習得(1), ヴィゴツキー学, 3, 1-9, ヴィゴツキー学協会
- (8) ヴィゴツキー, p289
- (9) ヴィゴツキー, p403

- Second Language Research*, Ablex Publishing
- Lyons, John, 1977, *Semantics 2*, Cambridge U.P.
- McCafferty, S.G., 1994, The Use of Private Speech by Adult ESL Learners at Different Levels of Proficiency, 117-134, in Lantolf, J.P. & Appel, G. Eds.
- Woodall, B. R., 2002, Language Switching: Using the First Language while Writing in a Second Language, *Journal of Second Language writing*, 11, 7-28
- 池上嘉彦, 2007, 『日本語と日本語論』, ちくま学芸文庫
- 國廣哲彌 (編), 1982, 『日英語比較講座第4巻発想と表現』, 大修館書店
- 中村和夫, 2004, 『ヴィゴツキー心理学』, 新読書社

参考文献

- Guerrero, M. C. M., 2005, *Inner Speech-L2*, Springer
- Lantolf, J.P. & Appel, G. Eds., 1994, *Vygotskian Approaches to*